

---

**未定**

皐月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

未定

### 【Nコード】

N4855P

### 【作者名】

皐月

### 【あらすじ】

あらすじって何書けばいいかわからない。

## 第一夜

蛍。

お尻が光る事で一般的に知られている虫。昔はその姿を夏になれば見ることは出来たが今となっては数が減り見かける事も少なくなっ  
てしまった。環境破壊とでも言うのだろうか、蛍の住む環境が人間  
による開発によって奪われた。

いずれその姿も幻想になってしまふのだろうか。

懐かしい夢を見た。まだ俺が子供の頃、あの頃は夏になると実家の  
近くの河原に沢山の蛍が集まっていたとその蛍を見に行ったりした。  
何故だろう、とても大事な事を忘れていている気がする。そこで何かを  
見たような…。  
なんだったつけ？

朝。

目覚ましの音で目を覚まし、顔を洗う。朝食を作り、弁当の準備を  
し、朝食を食べる。そして身支度を整え、仕事に行き、仕事が終わ  
ると家に帰って寝る。そんな何回繰り返したかわからないサイクル  
を経て1日を終える。今日もそんな1日だと思っていた。

「はあ、出張ですか。」

突然の出張。何でも最近働きづめだった俺を気遣ったの事らしい。しかも出張先は実家のある町。たいした仕事じゃ無いから少し羽でも伸ばしてきてくれという。別に会社を休む理由がなかったから休日も仕事をしていただけなのだが。まあ、たまにはいいか。

電車を乗り継ぎ何年ぶりの故郷。

暫く経った所為かこの辺りも開発が進んできて空き地や森は減り、その代わりかビルが建ち並んでいた。子供の頃の遊び場が無くなっているのは寂しい感じがする。ここまで様変わりしていると余り帰って来たという気がしないな。

久しぶりの故郷に困惑しつつも何とか実家に着いた。流石に実家までは変わっておらず一安心。

「ただいまー。」

玄関を開けまた何年かぶりの言葉。あつちじゃ一人暮らしたかったかなあ。彼女なんて夢のまた夢だし……止めよう、なんか悲しくなってきた。羽を休めに来たわけだから落ち込む時じゃない。

夜。

「……飲み過ぎた。気持ち…悪い……。」

久しぶりの一人息子の帰郷にやけにテンションの高かった両親。嬉しいのは分かるけど、幾ら何でも飲ませ過ぎだろ…。俺も久しぶりに両親の顔が見れたから満更でもなかったのだが、調子に乗りすぎた。そんな訳で俺は家の近くの河原まで酔い醒ましに散歩に来てい。この辺りは昔とあんまり変わってなくて安心。こんな状態じゃなければもう少し思い出に浸れたのだがなあ。あ、また気持ち…悪い……。

「はあ、やっと治まった。」

吐き気を催してから数回の試練（嘔吐）を乗り越え、何とか治まった吐き気と共に顔を上げる。吐き気が治まったと同時に酔いもすっかり無くなってしまったようだ。落ち着いて冷静になった所でポケットの携帯を開く。すると時刻はもう日付の変わる頃。

「いけね、もう帰らないと。」

早く帰って寝ないと明日の仕事に響いてしまう。羽を休めに来たとは言え、仕事で来てる訳だからなあ。さっさと家に帰ろうとする。が、

ポタッ。

「へ？」「

顔に冷たい物が当たる感覚。どうやら雨が降り出したようだ。酔って気持ち悪い状態でのこの仕打ち、泣きっ面に蜂とはよく言ったものだ。仕方無く近くの木の下に雨宿りをする。

「はあ…。」

何度めの溜め息だろうか、思わず気分も落ち込んでしまう。明日仕事なのになあ…。はあ…。あ、また溜め息ついた。

「どうしたのさ。そんな暗い顔をして。」

「いやなあ、酔い潰れて外を散歩してたら雨が降って来ちゃってなこのザマさ。」

「あちゃー。お兄さんついて無いね。あんまり飲み過ぎはいけないよ。」

「そつだよなあ。次から飲み過ぎには気を付けるか。」

「そつそつ。」

うんうん、「酒を飲んでも呑まれるな」ってね。これは教訓にしなければ。ん？

ここで疑問が一つ俺の中で浮かぶ。オレハイツタイダレト……？

「うわあああ！助けてー！」

いやあ、面白い。人間って奴は本当に面白いね。最初は全く驚かなくてちよつと焦ったけど、それも酔いが回ってたから思考能力が無かったただだったようだね。  
あれ？今まで震えて縮こまっていた人間の動きが止まった。シヨツクで気絶でもしてしまったかな。

「おーい。大丈夫？」

恐る恐る声を掛けてみる。よく見たら唇が動いている。何か言っているようだ。えーと、

「これは夢だ、夢だ。そう夢なんだ。でなければこんな夜中に女の子なんて……。ん？女の子？」

うわっ。今度は急にこっち見てきた。じっと観察されてる。そんなに見つめられるとなんか私が照れる……。はて、この人間って…、

「何だ、やっぱり夢か。さっさと寝よ。」

「は？」

え、何この人間。急にいびきをかいて寝始めた。何なんだこいつ。

..... ۱۱۵۰۴۱۰۲۶۱۰۰



## 第二夜

朝。

目が覚める。今日もいつも通りの日々のはずなのだが、今回はそうもいかなかった。

知らない天井。見慣れない壁。嗅いだことのない香り。見たことのない女の子。小鳥のさえずり。

「は？」

色々とおかしい。OK、冷静になろう。ひっひっふー。ひっひっふー。呼吸を整える。落ち着け俺、これは出産の時のやつだ。

落ち着いて深呼吸。

一先ず冷静にはなれた。とりあえず今俺が置かれている状況の確認をする。

知らない天井。見慣れない壁。嗅いだことのない香り。つまりここは俺の家では無い。

見たことのない女の子。これもここが俺の家ではなく実家でも無いことを物語っている。こんな子親戚にはいなかったしな。

小鳥のさえずり。うーん、平和。

.....  
「ここ何処だよ！」

間を置いてからのツッコミ。ちょっと待て、何処だよ。誘拐？攫われたの俺？誰が、何のために？

ふと部屋の中に居た女の子がこっちを見ている事に気付いた。えーと、どうしたらヨイノデショウ。もしかして、いやもしかなくてもしかってそう言う事？

そういえば昨日は酔ってたし、雨宿りしてからの記憶が無い。

ここでクイズ。

俺は知らない部屋にいて布団で寝ていた。部屋には女の子。更に酔ってた為俺には昨晚の記憶無し。さて、これから導き出される答えはなーんだ？

答えは両腕ガツチャン。さらに怖い制服を来たお兄さん達から拉致。そして俺終了。何故なら.....言うまでもないか。

いや、まだそうと決まったわけではない。希望を持つ。偶々酔っ払って寝ていた俺を偶々通りかかったあの子が介抱してくれたとか.....。うん、そうに違いない！

意を決して声を掛ける。

「あー！」

限界だ。もう無理。笑いをこらえるので精一杯。

この人間目を覚ましたと思ったたら固まるし、その後「ここ何処だよ！」って叫んだと思ったたらまた固まったり。とにかく落ち着かない。その後も顔が青くなったり、急に悶えだしたり…。

ん、またこつち見た。

「あの一。」

話し掛けてきた。怖がっているのか若干体が震えている。

「あの一？」

「え、ああ、はい。何か用？」

「いやまあ、うん。ちょっと俺の質問に答えて貰っても大丈夫？」

まあ普通に考えたらそうなるよね。目が覚めたら知らない所に居るわけだし、疑問も湧いてくるか。

「いいよ、簡単な事なら。」

「良かった。じゃあまず一つ。ここは何処？」

「ここは私の家だよ。まあ家って言っても小屋みたいなものだけど

ね。」

「ふむ、じゃあ二つ目。何で俺は君の家に居るのかな？」

「あれ、昨日の事覚えてないの？」

そう言った途端目の前の人間は急に血相を変えてガタガタ震え始めた。うわあ…正直気持ち悪い。

一応心配なので声を掛けてみる。

「ちよつと、大丈夫？」

「いや、君こそ大丈夫か。本当にすまない。俺が何をしたか記憶に無いが今ので大体の事は分かった。この通りだ。」

突然土下座をしてくる人間。

「ちよ、ちよつと待って。お兄さん多分勘違いして…」

「俺はこんな子にお兄さんなんて呼ばせて…。何てことをしたんだ。こんなんで許すなんて無理だろうけど、こうなったら責任取って死ぬしかない……。」「

いやいやいや、何でそうなる。この人間本当に勘違いしている。何とかして落ち着かせないと、

「いいから落ち着いて。お兄さんはただ酔っ払って寝てただけ。それを私が家まで連れてきて介抱してただけだから。」

「へっどづいづいとっ」

やっと落ち着いたか。とりあえず事情を説明してあげる。

「なんだ、そういう事だったのか。」

ほう。と、胸を撫で下ろす。

ただ酔っ払って路上で寝てた俺を運んでくれて介抱してくれただけだったようだ。俺はてっきり、あんな事やこんな事を酔った勢いで……。

兎も角、俺を助けてくれたことにはお礼しないとな。

「ありがとう。介抱してくれた上に騒いであって。本当にすまない。」

「大丈夫。私も暇潰しに散歩してただけだから。気にすることは無いよ。お陰で暇を潰せたし。」

「そう言ってくれると助かるよ。何とかお礼をしたいのだが、何か俺にして欲しい事は無いかな？」

言葉だけではとてもじゃないけど足りない。一宿の恩義はちゃんと返さないと俺の気がすまない。

「して欲しいことかぁ。うーん。」

女の子が考えている間に俺の中でも幾つかの疑問が浮かんでくる。

まず、何故こんな所に住んでいるのか。

おそらく彼女は一人暮らしなのだろう。この家は精々六畳程の広さで、二、三人で住むには狭い。更にこの家は異様にボロい。雨風は凌げるものの、人が住むにしては少しばかり環境が悪い。

次に、彼女は何者か。

さっきまで気付かなかったが、よく見れば頭の辺りから触角のようなモノが生えている。最初はそういうヘアバンドかと思ったが、どうやらそうでもないらしかった。髪の毛は緑色をしているから染めているのだろうか？ 恩人にこんな事を思うのは失礼なのだが、少し恐怖感を覚えてしまう。

そんな事を考えている内に思い付いたのだろう、突然顔を上げて女の子は、

「うん、じゃあ私の暇潰しの相手になってくれない？」

正直もう少し無理な願いを言ってくるかと思っていたので拍子抜けした。

「暇潰しって、具体的には？」

「何でもいいよ。そうだね、まだお互いの事も分からないしとりあえず自己紹介でもしようか。」

じゃあは私からと前置きをして、

「私の名前はリグル。リグル・ナイトバグ。名前を聞けば分かるけど私は日本人じゃないゆ。呼び方はリグルでもリグルちゃんでも何でも構わない。」

リグルねえ。

変わった名前だなあ。おっと、俺も自己紹介をしなければ。

「俺の名前は……。」

「やっぱりいいや。」

「へ？」

「いいよ、別に自己紹介なんて。面倒臭い。そんな事より何か話そうよ。」

「お、おう。分かった。じゃあ何を話そうか。」

それから色んな話をした。俺が何でここに来たのか、俺の家族の事、他にも色々。

大した事じゃ無かったが、彼女はそれなりに楽しんでくれたし、俺

も久々に充実した時間を過ごすことができた。

「……………それでなあ、大変だったんだよ。」

「あはは。お兄さんってば面白いね。」

「そうか。楽しんでくれて良かった。おっと、もうこんな時間か。」

気付けばもう日が傾いていて空が橙色に染まっていた。話に夢中になりすぎて時間を忘れていたみたいだ。

……………ふむ、何か忘れている気が……………。はて、何かな……………、

「あああああああ!?!」

やっべ、仕事。俺は仕事しにここまで来てたんだった。

どうしよう。落ち着け、落ち着け自分。そうだ、携帯を見よう。うわっ、不在着信18件にメールが15件。

ふと横を見るとリグルが心配そうにこっちを見ている。

「大丈夫?急に叫んだりして、何かあったの?」

「ああ、大問題だ。下手すりゃ今後の人生に関わっちまう。」



一回のミスで職を失う事無いだろうが、何とか挽回しなければいけない。

「ええ!？」

「じゃ、そっぴい事で。」

「へ、いや、ちょっと………行っちゃった。絶対道分らないだろうに、どうするつもりなのかな?」

数分後。

そこにはリグルに道を尋ねに帰ってくる男の姿があった。

「あれだね、お兄さんってバカだね。」

「面目ない……。返す言葉がないな。」

情けねえなあ

。結局家の近くまでリグルに送ってもらった。意外とリグルの家から俺の実家が近く徒歩10分程で着く距離だった。驚きである。

「じゃあ、この辺で。後は道分かるよね。」

「おう。ありがとう。じゃあまたな!」

「うん。またね。」

またね、かあ。

こんな言葉を掛けるのは初めての事。

勿論掛けられるのも初めて。

一体私はどうしてしまったのだろうか。今更になって人間と関わってしまうなんて。まあ悪い人間では無さそうだから大丈夫だろうけど。

「はあ。帰って寝よ。」

昨日も今日も私は少しおかしいようだ。

しかし、何故だろう。初めて会ったはずなのにそんな気がしない。きっと気のせいなんだろうけど。

あの後、急いで家に帰った俺が両親からも会社からもこっぴどく叱られるかと思っていたのだが、そんな事はなく、両親はともかく会社からも、「別に休むなら連絡入れてくれれば良かったのに。まあ、次から気を付けてね。と言うか別に来なくてもいいよ、休んでて。こっちも仕事が無くて暇すぎる位だから仕事取らないでね。」と、

本当に俺に羽を休ませる予定だったらしい。ゆるゆるである。お陰で出張期間の一週間が暇になってしまった。

誰に伝えるでもない独り言。

「こんなんでいいのか？」

田舎の夜は更けていった。

## 第二夜（後書き）

どうもー。

書くこと無いけどあとがき書いてみるかー。みたいなテンションの作者です。

この小説は元々友人のリクエストで書き始めた物で、どうせ読むのあいつらだから文以外適当でいいかなー位の感覚だったのですが、アクセス解析見てみたら他にも何人か見ているみたいだったのでとりあえずあとがき位は書こう。的な感じですよ。

まあ実際あとがきを書く位で、あらずじとかかなり適当ですけどねー。  
ー）キリッ

実際小説なんて書いた事が無くて一応これが処女作な訳で、色々酷い所があります。というか酷い所以外ありません。

それでも読むよーって物好きなお方は付き合ってくれと幸いです。

文章もただとあとがきすら纏まってないなー。色々と精進したい。

### 第三夜

朝。

いや、訂正。もう昼過ぎだ。仕事が無いから起きる必要もない為こんな時間まで寝ていたようだ。遅めの昼食をとり、背筋を伸ばす。

「~~~~~」

声にならない声を上げる。

暇である。仕事で毎日を過ごしてきた俺にとって、何も無い日というのは正直どう過ごせばいいのか分からない。

父は仕事で居ないし、母は奥様方の集まりとかいうやつに行ってしまった。

もう一度言おう。暇である。

「帰ったら何か趣味を見つけられないなあ。」

また急に休みが出来たりすると、一日何もしないというのは勿体無い。

地元なのだから誰か会う人は居ないかと思いつかべて見るが、地元の友人とは散り散りになってしまっから連絡は取り合っていないなあ……。

そっぴや彼女、リグルはどうしているのだろうか。何というか不思議な子だった。容姿も人とは違ったけど、雰囲気とか何か違ったなあ……。

私リグル・ナイトバグは妖怪である。細かく言えば蛍の妖怪だ。

妖怪という存在は人間を襲うモノだ。妖怪には妖力というものがあって、その妖力が無くなると妖怪はやがて消えてしまう。純粹に体の形が保てない、例えば頭が潰されたりした場合等は死んでしまうのだが、基本的に妖怪は人間に比べると体が丈夫で、ちっとやそつと事では死にはしない。

その妖力は日々減っていつて、体を回復させる時などには多く妖力を消費する。

妖力を回復させる方法としては「人間を襲う」と言うものしかない。襲うと言っても別に人間を殺す必要はない。驚かしたり、怖がらせたりする事でも妖力は回復する。

だが、人間を殺した方が妖力は多く回復する。何回も驚かすより一回で済む方法を殆どの妖怪が選ぶ。

その方法を選ばないのは人間に勝てない小妖怪か人間を襲いたくない変わり者ぐらいである。

兎に角、妖怪という存在は人間に依存して生きてきた。

しかし、問題が生じた。妖怪には身体的な「力」という武器を持っていたが、人間には「知恵」という武器があった。体は脆弱なままだが得体の知れない武器を使い人間には妖怪が恐怖を抱いてしまうほどの「力」を持った。

そういった武器を持っていても流石に妖怪を駆逐できる程ではなく、人と妖の均衡状態は続いていくかに思われた。

だが更に人間は「科学」という新しい武器を手に入れた。

科学によって人間は妖怪の存在を信じなくなった。妖怪の存在を人間の理屈で正当化されてしまい存在を抹消されてしまった。

存在が消えてしまったらそれは「幻想」へとなってしまふ。

幻想となってしまうえばその存在は消えてしまふ。

消えてからどうなるかは分からない。

それが私は怖い。消えてしまいたくない。友達はみんな消えてしまっていた、はず。そうだったのかも思い出せない、存在が無くなってしまうのだから。

ただ居たであろう痕跡だけが残っている。

「……でも。」

どうしたら良いか分からない。

どうしたら忘れられない？

どうしたら消えない？

どうしたらいい？

だれかこたえてよ。

「だれかこたえてよ……。」

だれでもいいから。

なにかいってよ。

だれでもいいから。

わらってもいいから。





### 第三夜（後書き）

さあ二週間振りの更新でございます。

次々と届く友人からの催促状。そこで私も更新しないと重い腰を上げたがこの少ない文章。  
こんなんでいいのかなー？

あとがきも何て書いたらいいかわからないでふ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4855p/>

---

未定

2011年1月3日19時51分発行